

一

次の――線部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- 1 一途に思い詰める。
- 2 これ以上なす術がない。
- 3 君と僕とは親しい間柄だ。
- 4 準備万端ととう。
- 5 彼を生徒会長に推した。

二

次の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- 1 雑誌をカンコウする。
- 2 マワタを入れた布団。
- 3 センセイ君主による統治。
- 4 小売店に製品をオサめる。
- 5 親にコウヨウを尽くす。

三

次は、自身の転居を知らせる手紙である。 1 5 にあてはまる語をそれぞれ選び、記号で答えなさい。

1 2 の候、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。
さてこのたび、東京へ転居いたしました。

お近くへお越しの際は 3 にもお寄りください。

まずはご挨拶がたがた、お知らせ申し上げます。

4

令和二年四月一日

攻玉太郎

近藤真琴先生

5 奥様にもよろしくお伝えください。

1 ア 拝殿	イ 拝読	ウ 拝啓	エ 拝見	オ 拝観
2 ア 花冷え	イ 小春日和	ウ 時雨	エ 入梅	オ 青葉
3 ア 貴宅	イ 本宅	ウ 平屋	エ 御宅	オ 拙宅
4 ア 冠省	イ 謹啓	ウ 有終	エ 敬具	オ 失礼
5 ア 約言	イ 追伸	ウ 承前	エ 余滴	オ 余録

四

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

※ 満洲の植民地生活では、そう手当も行届かないから、お産に障りが起つてはならぬというので、故郷の実家の方へ送り返されていた嫂も、無事に出産が済み、母子とも産後の肥立ちが好かったので、それを迎い旁々、一ヶ月ばかりの賜暇を得て、兄が東京へ来たのは、庭の楓が葉を広げ切った、六月初めの事だった。兄はこの二三年、自分が満洲のある製鉄所に、技師として行っている間に、わずか一、二篇の小説などによって、意外にも有名になっている弟が、思いの外小さく暗い家に住んでいるのを、鳥渡また意外に思わざるを得なかった。

ア 俺はまたお前が、もつと広い広い家に住んでいると思ったから、妻子もろとも手足を伸ばして、ゆっくり逗留して行く積りだったが、これじゃ余り狭くって、四人厄介になるのは気の毒だなあ。」

兄は着いた翌朝、一坪程な庭へ出て、一本庭を蔽うた楓の葉蔭から、茶室というほど雅びてはいないが、兎に角風変りな中二階建の小さな家をつくづく眺め入りながら云った。実際私の住んでいた家は、使える室としては八畳と六畳の二間きりなかった。

「そうだなあ。」と私も苦笑して「兄さん達が来るまでには、何処か広い所を見つけて越す積りだったんだけど、どうもいい所が見つからなかったんだよ。——けれど狭いには狭いが、他へ行くよりはいいだろう。僕は六畳の方にお母さんと一緒に寝て、八畳の方を提供するから、兄さんたちさえ関わなければ、ゆっくり泊ってっておくれよ。」

「それあ他に泊る所ってないし、東京の宿屋は馬鹿高くて厭だし、どうしても此処へ厄介になるしかないんだが、随分迷惑だろうなあ。第一お前の書き物の邪魔になるだろう。」

「そんな事大丈夫だよ。俺は何処でも書ける性分なんだから、書こうと思えやどんなに子供が騒ごうと、平気なんだよ。ただ余り嫂さんに気兼ねをさせちゃ気の毒だ。」

「なあに、そんな事関わらないがね。」

兄は口ではこう云いながら、眉根を寄せるようにして、楓の枝の混んだ中央部の、こんもり黒ずむ位まで茂った梢を見上げていた。……

一週間ほどすると、兄は故郷から、嫂と四つになる辰夫と、それから生れたばかりの赤ん坊を連れて来て、兎も角も家に逗留する事になった。

赤ん坊というものは、私は初めて（あ）と見たのだが、想像していた以上に、可愛いものだった。私は一体子供嫌いという程ではないが、東西も弁えない赤ん坊なぞは、ただへ1へ云うばかりで厄介なものだと位にしか思っていなかった。ところが、兄の赤ん坊は、気味が悪い位おとなしかった。小さな鼻腔をふくらまして、へ2へ寝入っている時は勿論、起きている時でもただ手足を伸び縮みさせて、白い地虫のように蠢いているのが、実に妙な可愛さを感じさせた。殊にその足の平までが、自由に屈曲する程運動するのを見ると、何だか生の力の靈妙不可思議な現われを覚えて、変に感嘆させられた。自分の指一本握らしてみると、柔かい小さな、それ相應に暖かいものが、（い）と、むず痒いような握力で纏わるのも、堪らなく嬉しかった。

「こんなにおとなしくつても、丈夫に育つんですかね。」

私は「——という、世の諺なぞを思いながら、嫂に聞いてみた。

「ええ、大丈夫なんです。赤ん坊もある時期間は、ちつとも泣かない事があるんですよ。もつとも性によるんでしょうけれどね。

——この辰夫なんぞは、始終泣いて困りました。」

私は縁側にいる、今年四つになる辰夫を顧みた。

「おら、泣かねえぞい。」

辰夫は、この四、五ヶ月の間、お産をする母と一緒に、故郷の東北の方にやられていたために、言葉を覚える盛りを、すっかり奥州訛りの影響を受けてしまつて、そんな事を云つていた。彼は、母と叔父との對話中に、自分の名が出たのを、耳さどくも聞き取つて、すぐ抗弁したのだった。首の細い、神経質な、利口な子だった。少し眼が、斜視のように寄るのも、その疳性を証拠立て

ているようだった。この子にじつと見られると、私は鳥渡妙な畏怖を覚えた。

「ああ泣かないよ。泣かないよ。今はもう立派な兄さんになったんだからね。……お母さんは、前の事を云つてたんだよ。」

嫂は兄が脱ぎ棄てて行つた平常着を畳みつけながら、羽織の皺に氣を取られて、辰夫の方を見ずに、こう取消すように云つていた。

「泣かねえぞい。おら、泣かねえぞい。」

辰夫はまだこう云いながら、自分の前に置いてある、小さな鉢へ入れた金魚の水を、揺するように動かしていた。

「ああ泣かないよ。泣かないとも。辰坊は叔父さん所へ来てからだつて、一度も泣いた事はないじゃないか。」

私もこう云つて傍から、強く打消してやつた。耳敏くもこうして聞きつけて、一生懸命抗弁する、辰夫の態度が恐ろしい程いじらしかったからである。

「おら、ほんとに泣かねえぞい。……」

と、語尾を低めて、辰夫は云い止んだが、泣き出しそうな不服な顔で、まだ私の方を見凝めていた。彼は本能的に、私たちの子供だましの云い宥めを、内心知つて不快なのに違いなかった。

「ほんとに辰夫は過敏で困るんですよ。ついうっかりした事は云えないんです。」

嫂はこう小声で、私に云い訳するように云つていた。

「成程ね。」

見ると、辰夫はもう、さすが子供だけに機嫌を直して、しかし黙つたまま、（う）と自分の目前に置いてある、白い小さい化粧用洗面器の鉢に三、四尾入れられた金魚を眺め入つていた。

それは母が、昨日辰坊を連れて近所の街へ出て、序でに買つて与えたものだった。

「金魚も高くなつたものだねえ。少しいいになると、一尾十銭からするんだよ。これなんぞは十五銭だったのさ。」

母はその時そう云つて、その金魚を皆に見せたのだった。

「まあ、そんなに高いのを、有難うございます。」

嫂は改まってこう云った。彼女は自分のためには、半襟一つ買ってくれそうもない母が、孫のためにはそんな無駄なものに、島渡五十銭ばかりも投じて来たのを、少し嫉妬めいた嬉しさで見ていた。

「どうせ此奴悪戯をして、終いには弄り殺しまうんだから、もつと悪いのを買つて来て下さればいいのに。」

と、兄——辰夫の父——は、その用務を兼ねて出張して来たところの、会社の東京支店か何かへ出かけるべく、その座敷で支度をしていたが、ズボン吊りを肩へ擦り上げながら、寄つて来て云った。そして辰夫を見下して、「殺すんじゃないぞ。」

「ほんとに手で弄ったりしちゃいけないよ。」

私も辰夫がもう金魚鉢を、揺すろうとしているのを見ると云った。「すぐ赤い鱗が落ちて死んじまうから、金魚つてそつと見るものなんだよ。そら、見てるだけだつて綺麗だろう。ああ、そんなに水を揉まないで。金魚が地震だと思ふからね。」

「うん。」

辰夫はまだまだ馴れたというほどでない私から云われたので、おとなしく鉢から手を離れた。

「手の届かない所へでも吊ろうかね。」母はこう云っていた。

けれども私は、辰夫がその言葉を聞いて、恨めしげに此方を見ているのを見ると、何だかすつかり取上げちまうようで、こう云わずには居られなかった。

③「いいでしょう。可哀そうだから。」

それに安心したように、辰夫は小用をする時のように蹲んで、金魚鉢を未練らしく眺めていた。金魚は妊娠のような腹を揉み、尾鰭を揺るがして、しかも静かに泳いでいた。赤い影が水を透かして、鉢の底をぼんやり染めていた。

その金魚だった、今も辰夫が眺めているのは。――

しばらくして私が書斎にいると、日の翳った縁側の方で、母の何か云う声が聞えた。

「おや辰夫。いけないよ。おまえ金魚を弄っちゃあ。――ほんとに目が離されないね。いつの間にかこんなに、水の中へ手を突込んで追ひ廻しているんだもの。……ああこれ御覧こんなに鱗が剥れて、もう死にそうじゃないか。こんな事をする取上げちまうよ。」

「ううん。」と辰夫の泣き出しそうな声で、「おらの金魚だよ。おらんだよ。……」

私は出てみようと思つたが、丁度物を書きかけていたので、どつしり手製のメリンスの海老茶蒲団の上に据えた腰を立たすのが億劫だった。それ程大事でもなかった。

と、その声を聞きつけて、玄関の小さい間の隅で、赤ん坊を寝かしつけていた嫂が、出て来たらしかった。

「まあ辰夫。何をそんなに悪戯するんだねえ。ほんとに云うことを聞かないで。それはお祖母さんに折角買つて頂いたんだから、大切にしなければいけないんだよ。高価いんだからね。――さあそれを此方へお寄越し。」

母にそう云われると、辰夫は（え）と泣き出した。

それでも嫂は母の手前、可哀そうだけれど、もつと怒らなくちゃならないといったように、なおも叱りつけるのだった。

「泣くんじゃないよ。ほんとにこの子は、悪戯つ子の癖に泣虫で、……さあその手をお離したら。金魚を此方へお寄越し。」

「まあ、いいよ。いいよ。いいから預けてだけはお置きよ。ただ中の金魚を弄りさえしなければいいんだから。ね、辰夫、もう弄るんじゃないよ。」

母が却つてこう宥めなければならなかった。

「だつてお母さん。取り上げつちまわなければ駄目ですよ。こうして置けば、きつとまた手を入れるんですから。――ほんとに云う事をきかない子ですからね。」

「いいよ、そうしてお置きよ。――さあ、こうして置くからね。もう殺すんじゃないよ。もう決して辰夫は殺しやしないね。辰夫はほんとにいい子だから、お祖母さんの云う事はよく聞くね。」

「うん。――」

辰坊は止むを得ず、また心から承知したらしかった。

私はこうして母と嫂とが、金魚を中心に、また子供を中心に小葛藤を起したのを、書斎の中でじつと聞いていた。何だか少し日が翳ったような気持で。――

後で出て見ると、腹のあたりの鱗を三、四枚落されて、そこだけ薄桃色に白けた金魚が、一尾とりわけて水の上の方へ浮んで、身を斜に喰咄していた。が、まだ確かに生きてはいた。

それでその辰夫の悪戯も、母と嫂との葛藤も、それだけで済んだと思っていた。

翌る日、私が散歩から帰って来ると、その廊下で、辰夫がまた金魚鉢の中へ手を入れているのを発見した。私は悪戯は咎めたくなかったが、生きものを殺すという事には、心から咎め立てずにはいられなかった。

「おや辰夫。おまえまた金魚を弄ってるね。いけないよ、そんな事をしちゃあ。――ああもう一尾殺しちゃったじゃないか。」

私は思わず怒って、睨みつけるようにそう云った。

辰夫は私の見幕が恐ろしいのに、呆気にと取られたような顔を上げたが、例の少し寄ったような眼で私を見返しながら云った。

「うん。だってお母ちゃんが、これ、弄ってもいいって、別なのを買ってくれたんだもの。祖母ちゃんのは、あれ、あすこにあるんだぞい。」

成程そう云えば、粗末な紗の夏簾が、もう早めに懸けられた縁の向うに、別な金魚の硝子玉が吊られて、その中で赤いものが動いていた。で、その水鉢を覗いてみると、それはそう腹の大きくない、ほとんど鯉の子といったような痩せた金魚が、三、四匹入れているのだった。私は少し啞然とした。そして、如何に吾が子の愛のためとはいえ、そんな当てつけがましい事をする、嫂の心事を憫れむというよりは、腹が立った。そんな悪意からではないと、思い返す余裕もない程、一種の暗然たる憤慨を心の底に

覚えた。

私は思わず声を高めて云った。

「いや、お母さんが買ってくれたって、誰が買ってくれたって、そんなに金魚を弄り殺しちゃいけないよ。祖母さんは何も金魚が惜しくて、自分のだから、高価いからといって、殺しちゃ悪いと仰有ったんじゃない。またお母さんが幾ら自分のだからといったって、殺していいというものじゃない。金魚は生き物だから、殺しちゃあ可哀そうだというんだ。殺しちゃいけない。どんな金魚だって、殺しちゃいけない。」

それは実際、辰夫に云っているというよりは、嫂に云っている言葉だった。間接に嫂を非難している言葉だった。辰夫は更に呆気にと取られたように、瞳を寄せて、水の中へ入れた手を出したまま、まだへ 3 〵と指先から滴を垂らしながら、（お）とこの叔父を見上げていた。

果して台所の方について、何か料理を手伝っていた嫂が、手を拭きながら急いで出て来た。彼女は少し青い顔をしていた。私は黙って立っていた。

「さあ、辰夫。その金魚をお寄越し。それも弄っちゃいけないんだよ。弄っちゃいけないって、叔父さんが仰有るんだよ。おお怖、――叱られるから、さあもう弄るんじゃないやせん。……」

こう云いながら、彼女は辰夫の前から金魚鉢を取上げると、それを持って、前の金魚を入れてある硝子玉の吊してある処へ行つて、立ったまま、その口から鉢の金魚を一尾ずつ中へ滑り落とし始めた。水が鉢からポタポタ垂れたが、彼女はそれを気にもせず、金魚を残らず同じ玉の中へ入れてしまった。彼女はその間全く私の方を見なかった。

私は黙って見ている外なかった。辰夫も何となくこの場の、切迫した気分を感じたとみえて、何とも云わず母の手許を見つめていた。ただ金魚だけが、そう大きくもない硝子の円い世界に、そう一度に沢山同類が入れられて来たので、藻濁りを立てて泳ぎ騒いでいた。

「さあ、もうこれで何処からも苦情はないでしょう。」

嫂はこう云つて、何となく瘰癧的な、勝ち矜ったような笑いを、強いて頬に上せて見せた。

「ええ、そうですね。」

私も苦笑して、内心鳥渡暗い気持ちになりながら、自身もいつの間にかこんな葛藤の中へ入ってしまった事を悔いる心持で、そのまま書斎へ入って行つた。

其処には、私の書きかけの物が置いてある机の傍に、兄や嫂の旅用鞆や、行李、信玄袋の類が、所狭きまで置いてあった。私はそれらを眺めながら、こうしてこんな狭い家に、鼻を突き合っているので、知らず知らず双方の気が昂ぶのだと、今更ながら思い返すようにした。そして嫂のそんな気持ちを、——久しぶりで良人とも会いながら、こう狭い障子一重と隔っているかいけないような、弟の家に一緒に寝起きしては、沁々話をする暇もないので、そういうヒステリイ傾向を帯びるのだと、頗る察しのよい推算さえして、先刻の争いめいた言葉を、心から済まないように感じた。

「何しろ、もう少し広い家が欲しい。」

そんな事を思いながら、もうすっかり夏らしく、蒼いなりにぎらつく空を、そつと庇越しに覗いたら、その途端に、先刻からの争いの種なる、小さい金魚玉が目についた。それは折からの日の光りの屈折で、庭の暗い楓若葉を背景に、燦として光っていた。私はそれをいつまでも見つめていた。……

兄や嫂たちは、しかしながらその後そう居悪がりもせず、また吾々も厭がりもしないで、十日余りいた後に、便船の都合で帰って行つた。そうして永く居てみれば、矢つ張り名残惜しかった。

※が、あの小葛藤の記念なる、金魚玉は長く私の家の軒下に残つた。私はその□□□□□といったような、四角い位肥った腹に、鰭を豊かに付けた豪奢なものと、殺しても惜しくない程瘦せて清貧に甘んじているのと、二種類混つた金魚のいる金魚玉を眺めては、

時々例の微苦笑を禁じ得なかつた。

それは夏中、私の書き物に疲れた眼を、赤い動揺で慰めてくれた。

「緋鹿子の手から沈めし金魚かな。」……「金魚玉二階の君に悲しけり。」……長く忘れていた、そんな昔憶えの句を思い出した
りした。

(久米正雄「金魚」より)

※満洲…現在の中国東北部。

※賜暇…休暇をたまわること。

※逗留…旅先である期間とどまること。

※半襟…褌袴のえりにかける、かざりの布きれ。

※噁咽…あつぷあつぷする様子。

※紀念…記念と同じ。

問一 本文中のへ 1 へ 3 へに入る言葉として適当なものを、それぞれ次の中から選び、記号で答えなさい（同じ記号は一回しか使えない）。

ア すうすう イ にやあにやあ ウ ぼたりぼたり エ ぎやあぎやあ

問二 本文中の（あ）（お）に入る言葉として適当なものを、それぞれ次の中から選び、記号で答えなさい（同じ記号は一回しか使えない）。

ア ねっとり イ わーッ ウ きよとん エ じっ オ つくづく

問三 本文中の【 】に入ることをわざとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア かわいい子には旅をさせよ イ 寝ている子を起こすな ウ 泣く子と地頭には勝てぬ
エ 泣く子は育つ オ 老いては子に従え

問四 本文中の□□□□に入る四字熟語として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 呉越同舟 イ 有象無象 ウ 弱肉強食 エ 玉石混淆 オ 森羅万象

問五 線部ア～オの中で一つだけ違った人物の呼称を探し、記号で答えなさい。

問六 線部①「故郷の実家」はどこにありますか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 長州 イ 泉州 ウ 甲州 エ 奥州 オ 満洲

問七 線部②「もっと広い家に住んでいると思った」理由を、「～ので。」につながる形で、本文中から二十九字で抜き出さない（句読点も一字と数える）。

問八 線部③『いいでしょう。可哀そうだから。』について。次の文は「いいでしょう。可哀そうだから。」を補足説明したものである。ア　　ウ　　に適当な言葉を入れて、説明文を完成させなさい。

ア（三字）を イ（四字）でもいいでしょう。 ウ（二字）が可哀そうだから。

問九 線部④「小葛藤を起した」について。「小葛藤を起した」金魚は兄の家族が去ったのち「私」にとってどんな役割を果たすことになりますか。簡潔に述べられた一文を本文中から探し、最初の五字を抜き出さない（句読点も一字と数える）。

問十 ― 線部⑤「叱られるから、さあもう弄るんじゃないやありません」という嫂の発言を説明したものとして適当なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 叔父さんが叱らなければ、お祖母さんに買い与えられた金魚もお母さんの買ってあげた金魚も弄っても構わない。
- イ 叔父さんが叱らなければ、お祖母さんに買い与えられた金魚は弄ってもよい。
- ウ 叔父さんが叱らなければ、お母さんの買ってあげた金魚は弄ってもよい。
- エ 叔父さんに叱られるのは厭だろから、金魚を弄るのは叔父さんの家を出てからにしない。
- オ 叔父さんに叱られるのは厭だろから、金魚を弄るのは止めなさい。

問十一 この小説文の特徴を説明したものとして**適当でない**ものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 金魚のことを「赤い影」「赤いもの」「同類」「赤い動揺」など様々に表現して単調にならないようにしている。
- イ 古典的な短歌を作中に織り込むことで、作品の文学的な雰囲気をもし出そうとしている。
- ウ 「私」の家の庭の楓の描写が時折はさまれることによって、初夏の季節感が効果的に表現されている。
- エ 「私」、兄、母、嫂、辰夫、それぞれの登場人物が会話を通じて、それぞれの考えや思いを示している。
- オ 「私」は、この小説文の登場人物であると同時に語り手の役割もしており、各人の心理に分け入って説明をしている。

五

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

▼日本には昔から「ほどほど」という実にいい言葉があります。 **A** 子どもに対しては、ほどほどのところでやめておきなさいと諭^{さと}してしまうよりも、飽きるまでやらせる育て方のほうに一票を投じたいと思いますが、仕事の経験を積んでくると、この言葉の深い意味合いが少しずつ分かってきます。「ほどほど」には、やりきらずに手前で留めておくといったニュアンスがあります。これをデザインにそのまま置き換えてみると、「ほどほどのデザイン」となる。それだけを耳にすれば、あまりいいデザインではないような印象でしょうが、「ほどほどのレベルを徹底的にデザインする」、 **B** 「ほどほどのデザインを極める」こととして捉えるなら、印象は一変するはずだ。 **C** ここで話したい「ほどほど」とは、やりきることも承知しながら、敢えて手前のほどよいところを見極め、そこで仕上げておくことなのです。

この、少し手前でほどほどに留めておくデザインによって生まれる「空き」こそが、人がものと自分なりの仕方で付き合うことを可能にする余地になります。その人その人なりにものをカスタマイズできるのだと言ってもいい。そもそも人は、それぞれ価値観も違えば生活におけるあらゆる行動のとり方も一人ひとり違います。しかるに、完成しきって「空き」を持たないものを前にして、なんだか壁に阻^はまれているみたいだと感じたことのある方は少なくないと思います。もののほうから一方的に「こう使え！」と偉そうに言わんばかりであったり、ものとしては美しいけれどまったく実用する気にならなかったりするもの、「空き」がないためなのかもしれないのです。メーカーやデザイナーは、ついそのものだけを一つの作品のように見なしての完成度を目指してしまう傾向があります。当然「空き」など生まれようがない。しかし本来デザインは、それ自体に価値があるわけではなく、デザインされたものと付き合う人との関係の中で効力を発揮するのです。人の価値観はみな違うのだから、デザインは人それぞれの価値観で関わるることができる、ほどほどの領域で留めておくべきなのではないでしょうか。そこに「空き」が生まれます。

「ほどほど」という曖昧な日本語の中に、実はデザインがなすべき大切なヒントが含まれているように思います。そしてこの「ほ

「どほど」を、古来の日本の日常生活用具のそこに垣間見ることができるのです。▲

私たちの日常生活の中で何気なく使われている道具を人との関係で観察し直してみると、日本ならではのデザインが見えてきます。例えば、使う人の能力を前提に成立しているもの。ご飯を食べる時に使う「日本の箸」はその代表格です。先を細くした二本の棒を使いこなすだけで、小さな米粒や豆や、けっこう大きなジャガイモまで挟むことができるばかりか、この単純きわまる道具で肉を切り離したり柔らかいものを刺して割ったり、みそ汁をかき混ぜたり具のツルツル滑るワカメをつまみ上げて口へと運んだり、海苔で白米を包んだり、用途は多様で、小さな頃から経験を積んだ我々は、毎日のように二本の棒を無意識に使いこなしているのです。ここには西洋のフォーク、ナイフとは全く異なる「関係のデザイン」が見られます。フォーク、ナイフの進化について、ヘンリー・ペトロスキーが『フォークの歯はなぜ四本になったか』（平凡社ライブラリー）に詳しく書いていて、それはそれで微笑ましく、フォークとナイフが共に進化（共進化）した経緯は大変興味深い。現代のフォーク、ナイフには取手の部分があり、握りやすいように膨らんでいて、膨らみ具合がデザインの特徴になっている場合も多いでしょう。対するに、箸には取手に充たる部分がなく、取手どころか、どの指はどこに当てて、といったデザインは一切施されていません。ものの側から「このように使ってください」と教えずデザインではなく、素材のままそこに在って、見掛けは「どうぞご自由に」とやや素っ気ないくらいです。から、箸を初めて目にした他国の人は、いったいこれをどう使うつもりなのか？ と面食らうに違いありません。しかし使用法をマスターしてしまえば、食べるための道具としてのこの使い勝手の良さは他に代えがたいものになることでしょう。つまりは、二本の棒である単純さが、人の本来持っている能力をむしろ引き出しており、そこには人の所作さえもが生まれます。箸において日本人は、それ以上の進化による利便は求めてきませんでした。ですから西洋のフォークとナイフのような目に見える進化はしなかったものの、日本の箸は、ほぼ棒状のままの中国、韓国のと異なり、かつ金属ではなく主に木や竹を使い、先をかなり細くすることで、より繊細な動きに対応できるよう微妙に進化したのみならず、漆塗りのような丁寧な表面仕上げや材質選びにも伝統が活かされてきました。このように当りまえの日常の中に、ほどほどのところで留めておきながら徹底的に突き詰めようとする日本

らしさを見出すことができます。

食べるための道具は、食物と人間との関係によって進化してきたのですから、それぞれの国や地域の食文化全体の中で見極めていく必要がありますが、これだけ食の流通が行き届き、世界中の食べ物が入るようになった今もお、日本の箸は、あくまで日本の箸であり続け、しかも日本食が世界的なブームとなり、箸を使いこなす海外の人々も増えている事実注目すべきです。日本^②のデザインは内向きでガラパゴス化しており、もって世界に打って出るべきである、といった発言を時折耳にしますが、これはとんでもない誤解です。誰々が派手にデザインした何々に、ではなく、アノニマス（匿名）な箸のようなものにこそ、世界に誇るべき日本のデザインが豊かに潜んでいるのですから。

もう一つ、忘れてならないのが「ふろしき」です。何十通りもの包み方があり、あらゆる包む対象に合わせた対応が可能ならば、使わない時には小さく畳んでおける。つまり自由自在に変化できる一枚の布の状態に留めてあるわけで、それ以上はデザインしていません。バッグのように持手を付けた袋状に縫ったりは敢えてせずに、どこまでも原型を保ったまま使われ続けている。我々が何もかもを便利至上に走っていたのであれば、すでに息絶えてしまってもおかしくなかった道具の一つなのかもしれません。しかし人間の側に備わっている「考える」力や「適応する」力を引き出す余地をたっぷり残した「ふろしき」という一枚の布が、宅配で何でも便利に届くこの時代にまでちゃんと残っていること自体が注目に値します。これも、やり過ぎないほどのデザインの典型なのです。改めて申しあげるまでもなく、一枚の正方形の布であるがゆえに、「ふろしき」に施されるグラフィックデザインは無数の可能性に満ちている。今の時代、もともとと便利さを求めてその場その場に合わせた様々な形態をつくり出しているのですが、ある意味で不便な一枚の布が、ほどほどなところで留められたことによって、無限と言いたいほど表現可能なキャンバスになっている。また、少しばかり昔の日本の生活を思い出してみるなら、普段は折り畳んで仕舞い、使う時だけパタパタと広げて、必要なところに置けば室内の間仕切りとなる「」などにも、「箸」や「ふろしき」と同じ「ほどほど」が見えてくる

はです。今後甦^{よみがえ}るべき道具を、多く日常生活文化史に発見できるのではないのでしょうか。

デザインを考えることは、人の豊かさとは何かを考えることに他なりません。今、二十世紀後半を振り返ると、生活道具をあたかもオブジェのように完成させて、その美しさを競った時代のように思えます。二十一世紀も同様にオブジェとしてのデザイン^③を我々はなし続けるべきなのでしょうか。日常を少し見回してみただけでも、箸やふろしきや□のように日本人の振る舞いに準じて育まれてきた素晴らしいものが残っているのだと気づかれます。そしてそれらが体現しているのが「ほどほどを極める」なのです。人間の身体どころか心までを使わないで済むようにしてきてしまった必要以上の間違った便利さを見直して、ほどほどを極めるレベルを今一度模索しなければならぬ時が来ているようです。それこそは資源の問題、エネルギー問題、そしてこの国の文化的価値の問題などと密接に繋が^{つな}がってくると思われてなりません。

心と身体を使わないで済むような便利さが、果して人を本当に豊かにするのか。昔から普段よく言われてきた「ほどほど」や「いい塩梅^{あんばい}」などの言葉が、実は日本人が忘れてはならない大切な感性をしかと伝えているのです。

(佐藤卓『塑^つする思考』より)

※カスタマイズ：既存の商品などに手を加えて、好みのものに作り変えること。

※ヘンリー・ペトロスキー：一九四二年生まれ。アメリカ合衆国の工学者、デューク大学教授。

問一 本文中の□A□□C□にあてはまる語を次の中から選び、記号で答えなさい(同じ記号は一度しか使えない)。

ア ところで イ もし ウ あるいは エ もともと オ つまり

問二 本文中の□□にあてはまるものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 蚊帳 イ 障子 ウ 行燈 エ 暖簾 オ 屏風

問三 —線部①「関係のデザイン」とありますが、これはどのようなデザインですか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 利便性を追求した機能的な構造で、誰が使っても同じように簡単に使いこなせるデザイン。
イ 古くから伝わる型を重んじることで、伝統的な文化をより豊かに継承していけるデザイン。
ウ 美しさを追求する一方、実用性も重視することで、作り手と使い手が共感を得られるデザイン。
エ 単純な形状であるがゆえに、使う人の技術しだいで様々な場面に対応することのできるデザイン。
オ 作り手が生み出す独創性によって、使う人の道具への愛着を引き出せるデザイン。

問四 ―線部②「日本のデザインは内向きでガラパゴス化しており、もっと世界に打って出るべきである、といった発言を時折耳にしますが、これはとんでもない誤解です」とありますが、これはどのようなことを言ったのですか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 日本のデザインは、非常にすぐれたものが多くあり、ことさらに宣伝などしなくても、その良さに気づいた海外の人々が積極的に使用して、今や世界中のあらゆる場所で受け入れられているということ。

イ 日本のデザインは、自国だけでしか通用しないような閉鎖的なものではなく、人間との関係によつて独自の進化を遂げたものであり、それだけで世界に誇るべき豊かさがあるということ。

ウ 日本のデザインは、使用者の利便性を考慮せず、かたくなに古来からある意匠を継承しているように見えるが、実際には海外のデザインを取り入れて、現代的なものとして仕上がっているということ。

エ 日本のデザインは、本来日本人が使用するために作られてきたものだが、将来的に日本の人口が減少する中で、海外の人々を含めた多くの人にとって便利なものをデザインするべきだということ。

オ 日本のデザインは、海外の人々にはその使用法が理解できないものもあるが、実際に使用してその便利さに気づき、世界の生活様式が大きく変わりつつあるということ。

問五 ―線部③「オブジェとしてのデザイン」とありますが、これはどのようなデザインであると筆者は言っていますか。「デザイン。」につながるように、本文中の▼から▲までの間から三十二字の箇所を探し、抜き出さない（句読点も一字と数える）。

問六 本文の内容と合致するものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア フォークとナイフは、誰にでも使いやすい道具に見えるが、日々の生活で使い方を訓練することで、その機能をより生かせるようになる。

イ 日本のデザインの豊かさは、箸やふろしきのような、人々が日常生活の中で用いているものにこそ認められる。

ウ 宅配便で何でも届く便利な時代に、ふろしきが残っているのは、ただ一枚の布に人々の興味を引く図柄がデザインされているからである。

エ 日本のデザインについて知ることとは、人間にとって本当の豊かさとは何かを考えるきっかけを与えてくれる。

オ 人間にとって本当の豊かさとは、経済的な余裕を持ち、便利さを追求した道具に囲まれた生活を送ることである。

カ 日本古来の日常生活用具は、素材の特徴を活かした素朴なデザインであり、装飾的な加工は一切されない。

問七 ―線部「『ほとほとのデザイン』とありますが、これはどのようなデザインですか。本文全体をふまえ、「余地」・「能力」の二語を用いて、六十字以内で説明しなさい（句読点も一字と数える）。

一

1
2
3
4
5
(した)

一

--

二

1
2
3
4
(める)
5

二

--

三

1
2
3
4
5

三

--

四

問一 1	問一 1
問二 あ	問二 い
問二 う	問二 え
問二 お	

四

--

ので。

問八 ア	問八 イ	問八 ウ
---------	---------	---------

問九

問十
問十一

問一 A	問一 B	問一 C	問二
---------	---------	---------	----

問三
問四

問五
デザイン。

五

--

問六

問七
